

2024/10/13

ルカの福音書 講解メッセージ②⑥

『ルカの福音書 10 章 17-37 節 神が人を救う』

## ■悪霊の服従

「さて、七十人が喜んで帰って来て、こう言った。「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」」（ルカ 10:17）

イエス様が選んで遣わした 70 人の弟子たちは、福音を語って喜びに満たされて帰ってきました。伝道には迫害や苦しみもありますが、それに勝る喜びがあります。私たちも、友達の救いのために祈り、福音を語りましょう。

新約聖書の中で「悪霊」と訳されている言葉の大半は、ダイモニオンという偶像の神を指す言葉です。これは「偽りの情報」を象徴しています。

聖書を読むときに重要なのは、言葉のイメージに惑わされず、その言葉が何を意味しているのか、その実体をつかむことです。そのために、聖書は聖書によって読み解くことが大切です。

悪霊の実体とは、神に反抗する運動です。神は真理であり、いのちです。それに反対する運動とは、私たちが滅びへ導き、死に至らせる運動です。

残念ながら、この世界は死へ向かう運動に支配されています。それが偽りの情報であり、その象徴が偶像礼拝です。たとえば、この世は「この世界で成功すれば幸せになれる」「〇〇をすれば幸せになれる」と教えます。しかし、聖書は「イエス・キリストと出会うことで幸せになれる」と教えます。

伝道から帰ってきた弟子たちは、「死へ向かう運動さえ私たちに服従しました」と報告しましたが、それは「死は私たちに何もすることができない」という意味です。しかし、彼らはその意味の深さを理解していなかったので、イエス様は次のように教えました。

「イエスは言われた。「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。」」（ルカ 10:18-19）

イエス様は、悪霊が服従するのはサタンが稲妻のように天から落ちたからだと言われました。これはダニエル書の預言で、「人の子によって悪が滅ぼされて神の国が実現する時が来る」ということです。さらに『神の国があなたがたに来た』と言いなさい。」(ルカ 10:9) を言い換えたものでもあり、悪が滅ぼされ、あなたは死からいのちに移されたから、死の世界はあなたに害を加えないということです。

聖書は、「私のことばを聞いて、私を遣わした方を信じている者は、永遠のいのちを持っていて、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24 私訳) と教えます。

死は滅ぼされ、神の国はすでに来たので、死の運動はあなたに何もすることができないのです。それが、「サタンが天から落ちた」という言葉が意味するところです。

「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」

(ルカ 10:20)

悪霊どもが服従するとは、死の運動は神のいのちの前には勝てないということです。でも、そのことを喜ぶのではなく、「あなたが死からいのちに移されたこと、あなたの復活が確定したことを喜びなさい」とイエス・キリストは教えます。それは、希望を持って生きていきなさいということです。

## ■聖霊の喜びと肉による喜び

「ちょうどこのとき、イエスは、聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。」(ルカ 10:21)

喜びには2種類あります。聖霊による喜びと肉による喜びです。聖霊による喜びは、肉による喜びにはるかに勝る素晴らしい喜びです。その喜びを味わうことができれば幸いです。そのために必要なことはただ神と交わること、つまり祈ることです。神に祈るなら、聖霊による喜びを知ることになり、それを味わえば、この喜びを捨てることはできず、神から離れることはできなくなります。

神の御心は、神のことばを信じる者だけが知ることができるものであって、賢い者にはわかりません。神の教えは、理性ではつまずきになるものです。この世の人たちは、キリスト教の道徳的な教えには納得して共感しますが、処女マリヤから生まれたとか、十字架につけられて三日後によみがえったなどということは、信じられないと言います。それらは、納得するものではなく、信じるものなのです。この世のつまずきが信仰になるのです。「神の国が来た」と言われても、目に見えるものではありません。この世は見えない者は嘘だと言います。しかし、私たちは信じるのです。それは、信じる者にしかわかりません。

「すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、子がだれであるかは、父のほかには知る者がありません。また父がだれであるかは、子と、子が父を知らせようと心に定めた人たちのほかは、だれも知る者がありません。」（ルカ 10:22）

神を知ることができるのはイエス様だけで、信じることができるのは、神があなたに知らせたからです。幼子とは、信じる人たちのことです。聖書が教える「信じる」（ピステイス）とは、神の呼びかけに応答することです。イエス様は、知恵ある人ではなく、神の呼びかけに応答した人、すなわち、神を信じる者にご自身がキリストであることを示されました。神によって義とされるのは、神の呼びかけに応答したからだということです。

## ■律法学者の質問と律法の目的

「それからイエスは、弟子たちのほうに向いて、ひそかに言われた。「あなたがたのしていることを見る目は幸いです。あなたがたに言いますが、多くの預言者や王たちがあなたがたのしていることを見たいと願ったのに、見られなかったのです。また、あなたがたの聞いていることを聞きたいと願ったのに、聞けなかったのです。」すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」イエスは言われた。「律法には、何と書いてありますか。あなたはどの読んでいますか。」（ルカ 10:23-26）

この律法学者は、律法を守り、良い行いをするから救われるのだと信じていました。そこで、イエス様の間違いを証明しようとチャレンジしたわけです。彼は、イエス様の質問にも的確に答えており、確かに聖書をよく理解していたと思われます。

「すると彼は答えて言った。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ』、また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』とあります。」イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。」(ルカ 10:27-28)

イエス様は、行いによって救われるのではないと教えているにもかかわらず、なぜ、律法を実行すれば永遠のいのちを得ると言ったのでしょうか。そのからくりは、ガラテヤ人への手紙に書いてあります。

「心を尽くし、思いを尽くし」とありますが、すべてを尽くして神を愛するなどということが、人にはできるでしょうか。人は、常に自分が第一になりますから、自分自身のように隣人を愛するなど、とてもできないことです。つまり、聖書が教えている神の律法は、人には実行不可能なのです。しかも、聖書の基準は非常に厳しく、一つでもできなかつたらすべてできなかつたとみなされます。ですから、神の律法を100%実行できる人は誰もいません。

ですから、神の律法を実行しようとするならば、できない自分、人を愛せない自分に、必ず出会います。その時、私たちにできることは、「どうかこの罪人をあわれんでください」と神の前に出ることだけです。これこそが、神があなたに与えたい神の義なのです。

「ところが取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいていった。神さま、こんな罪人の私をあわれんでください。あなたがたに言うが、この人が義と認められて家にかえりました。パリサイ人ではありません。」(ルカ 18:13)

人をだまして金儲けをすることしかできなかった取税人は、苦しんでいました。こんな自分をすべてご存じの神に向かって彼ができることは、憐れみを求めることしかなかったのです。つまり、神に憐れみを乞うことが神からの義なのです。自分を正しいとすればするほど、神はあなたと関わることはできません。神様は医者と同じです。医者が関われるのは病人だけです。神から義を得るには、神のことばに従えない自分

に気づくことが第一歩です。そのためイエス様は、神を愛し人を愛するように言われたのです。

「しかし彼は、自分の正しさを示そうとしてイエスに言った。「では、私の隣人とは、だれのことですか。」」（ルカ 10:29）

イエス様の答えを聞いた律法学者は、自分はその御言葉を実行していることを証明しようとしていました。彼は、律法とは、自分の正しさを証しするためのものだと思っていました。自分の正しさを認めてもらって、神からのごほうびとして永遠のいのちを手に入れることができるというのは、当時の一般的な考え方です。その彼に向かってイエス様は、あるサマリヤ人のたとえ話をなさいました。

「イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、近寄って傷にオリブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』この三人の中でだれが、強盗に襲われた者の隣人になったと思いますか。」彼は言った。「その人にあわれみをかけてやった人です。」するとイエスは言われた。「あなたも行って同じようにしなさい。」

（ルカ 10:30-37）

祭司とは、今でいう牧師のような神に仕えることを仕事にしている人です。また、レビ人とは、神殿で中心的な奉仕をする人たちで、彼らは律法を守っていると自負していました。それに対して、サマリヤ人は、異教徒です。しかし、祭司もレビ人も、半殺しの目に遭っている人を見て、無視して通り過ぎましたが、異教徒であるサマリヤ人は、彼をかわいそうに思って看病し、治るまでお金を支払ってあげたというのです。

この当時、神殿の回りには、貧し人や病気の人が大勢いましたが、律法学者の中で彼らを助けようとした人は一人もいませんでした。このサマリヤ人が隣人であるとい

うなら、同じようにやっごらんと、イエス様は言われたわけです。つまり、律法を守っているというが、隣人を愛する行いができていないということは、あなたの考えは間違っていると示されたわけです。

自分の正しさを律法で証ししようとするのは間違いです。律法の目的は自分の正しさを証しするためのものではありません。神の命令を知って守ろうとするのは良いことですが、気をつけなければいけないのは、守っていない兄弟姉妹たちを「お前はそれでもクリスチャンか」とさばいてしまうことです。

律法は、神とあなたの間で、自分ができないことを知るためのツールです。あなたが 神の前にへりくだって神に憐れみを乞うための養育係です。

「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」(ガラテヤ 3:24)

このことをイエス様は教えたかったのです。私たちは誰もが罪人であるため、行いではなく信仰によって救われるのです。そして、何度でも神に憐れみを求め、義から義に進んでいくのです。それが、永遠のいのちを豊かにするということです。永遠のいのちとは、イエス・キリストです。キリストとの関係が豊かになっていくのです。皆が病人なのですから、すべての人が、自分の病気に気づき、救いを受け取り、癒してもらえばいいだけです。神の救いはいやしです。

「なぜなら、律法を行うことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」

(ローマ 3:20)

強盗に襲われた人を介抱してお金まで渡すなんて、普通できません。このようなことが書いてあるのは、律法は罪の意識を生じさせるためにあるからです。律法ではなく、イエス・キリストを信じる信仰による神の義によって、人は救われるのです。神の義は、イエス・キリストの真実によって、神の憐れみのゆえに、信じるすべての人に与えられます。

## ■信仰による義で救われる

「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」（ローマ 3:23-24）

「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」（ローマ 3:28）

いずれにしても、律法の義による行いでなく、神の呼びかけに応答する信仰によって人は救われます。それこそが正しい人間の生き方です。

「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」（ローマ 1:17）

私たちは見えるものを目指して生きるのではなく、信仰によって生きるのです。そこに、どんな苦しみがあろうとも、神を信頼して生きていく、これが私たちの正しい生きかたです。イエス様は、「神がいつもあなたと共にいるから信じて生きていきなさい。」ということをお教えたかったのでした。

神からの義は、行いでないゆえに希望があります。誰であれ、平等に神を知ることができます。誰もが神を知ることができ、神との関係を深めることができます。そのことを知り、ますます信仰から信仰へと進み、友と呼ばれる関係を築いていきましょう。